

カモシレナイの意味再考

—条件節への出現と副詞との共起にも注目して—

于 康飛 (YU KANGFEI)

urarayukangfei@yahoo.co.jp

文教大学大学院 言語文化研究科

1 はじめに

1970年代以降、モダリティに遡進する研究が数多く発表されてきた。カモシレナイを大いに論じた研究には命題成立の確率度、可能性の低さ等を巡る議論がよく出ている。本発表はカモシレナイの意味を、意義素性の視点でより一層明瞭かつ詳細に記述することを目的とする。カモシレナイの条件節への出現と副詞との共起も視野に入れて考察し、客体世界を捉えるカモシレナイがナラ節に出現し得ること、カモシレナイの持っている意義素性によって共起してくる副詞も異なることを主張する。

なお、天野(1999)は「副詞はある種の機能範疇(functional category)も含む主要部によって認可されると仮定する。これを大前提とし、少なくとも副詞は統語論的にのみ認可されるのではなく、意味論的にも認可されなくてはならないことを示す。その認可は、語用論的でさえある可能性もある」と述べている。本稿は副詞タシカニがカモシレナイと共起することを考察しながら、その認可が語用論的に汎用することが可能かどうかを試みる。

2 認識的な用法

2.1 真実に接近

従来、カモシレナイが可能性表現として取り扱われてきた。三宅(1992:38)はカモシレナイの意味を、「命題が真である可能性がある」と認識している」と記述している。宮崎(2002:145)もカモシレナイが「命題が真である可能性が低いというわけではない」と述べている。カモシレナイの表している命題が真となる可能性の確率度を問わず、本発表はカモシレナイの表している命題が不確実ながらも真実に接近すると提言し、[+真実へ接近]という素性で記す。

2.2 命題真偽の未断定

寺村(1979:78)はカモシレナイ、ニチガイナイについて、「ここではダロウのバリエーションというにとどめる」と述べている。両者を「推量」に分類していることが窺い知れる。その後、カモシレナイが蓋然性や可能性を表す形式と認識された研究が殆どである。本発表は命題の真偽を断定できないカモシレナイが、[-命題の断定]素性を有することを仮定しておく。

2.3 未知への推測

中畠(1993:16)は「カモシレナイは事実や現実の事態をふまえて(あるいは全くそれに無頓着に)話し手の予測、推測を示す場合に用いられる」と述べ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ダロウは「仮想を描く」という共通する性質を有している。未然の事柄に接することができるカモシレナイに、本発表は中畠(1993)に従い、カモシレナイが[+未知の仮想]という素性を持っていることを仮定しておく。

2.4 複数命題

先行研究ではアルイハ¹がカモシレナイと共起するということがよく取り上げられている(宮崎 2002 等)。(1)、(2)のようにカモシレナイは複数の命題を同時に捉える用法が確認された。本発表はカモシレナイが複数の命題を捉えうるのは、あらゆる真実に接近する事柄を表すからである。

¹ 本稿はカモシレナイが複数の命題を同時に捉えうるため、二つの命題を捉える際に、並列を表すアルイハが参与してくることが当然であると主張する。

- (1) 人間の思考による答えは、Aかもしれない、Bかもしれない、Cであるかもしれないという探求の中から生まれてくることに意味があるとおっしゃっています。(BCCWJ)
- (2) 兄貴が電話をかけた相手は、柿谷たちの口ぶりから察すると、それまでの会話に出てきた人物のようだ。桃子さんかもしれないし、釘宮君かもしれない。エリート杉下やココリカの可能性もある。誰にせよ、当人は兄貴から電話を貰ったことを真世に話していない。(ブラ)

3 婉曲の用法

3.1 判断の受容

会話の中で相手の発言に後接するカモシレナイがよく見られる。(3)において、「かも知れません」の前に盛り込まれた「そう」が十津川による発言や判断に当たる。平田(2001:62)がこの種のカモシレナイを間接的表現として認めているが、本発表は間接表現より、ワンプラディット(2008:191)のいうカモシレナイが話し手の信念を含まず、ただ単に客観的な世界の様相を表すという説明を踏襲し、カモシレナイが「判断の受容」という意義素性を持つことを仮定する。

- (3) 十津川：問題の手帳は柩の中におさめて、茶毘に付してしまえば、すむことなんだ。違うかね？
亀井：確かに、そうかも知れませんが、いぜんと手帳の謎は、残ってしまうわけでしょう？彼女が、犯人でないとするのです。(仙台)

3.2 非同意

平田(2001:62)はカモシレナイが、基本用法「押し量り」から派生・拡大された「婉曲」という意味の下位分類の一つである「疑似的同意」という用法を持っているとしている。しかし「疑似的同意」はあくまで話し手が相手のメンツを立てるという機能を果たしているだけである。いくら「疑似的同意」でも、完全に相手の意見や判断などに同意するわけではない。

従って、本発表は平田(2001)の考察に異を唱え、カモシレナイに「疑似的同意」ではなく、「-同意」(或は「+非同意」)という意味があると提言し、「-陳述の同意」意義素性で記す。

3.2 事実の表明

杉村(2001:210-211)は量子力学の一般的な理論を述べる例文²を羅列しながら、カモシレナイが推量判断だけでなく、一般的な事実を表す場合にも使えると説明している。本発表は杉村の論説を取り入れ、カモシレナイが「+客観的真実」の意義素性を持っていることを仮定する。

- (4) 線路全体を考えれば、複雑さはさらに広がる。電子は、たとえばAから出発してまっすぐに0まで来たのかもしれないし、ぐるっとまわり道をして0にたどりついたのかもしれない。これらすべての可能性を加えてはじめて、現在電子が0にある状態の共存度が計算できるのである。
(杉村 2001:85 の例(10))
- (5) 「俺もそう思うよ」カウンターの内側から沼川がいった。「通夜や葬儀に来られなかった連中は、せめて同窓会で神尾に悔しみの言葉をいいたはずだ。たしかに中学時代には先生の娘ってことで、神尾を避けていた奴もいたかもしれないけど、お互い大人になったんだし、そんなのはもう関係ないよ」(ブラ)

本発表は例(5)のように、カモシレナイも一般的な事実を表している例文として認識している。話し手の沼川は神尾の同級生であり、中学生時代に神尾を避けた人がいたことを事実³として記憶に押さえている。しかし、例(4)と異なるの

² 明確に BCCWJ からの出典だと記記しない例文は、一般書籍から拾い上げた例文である。

³ 先行研究では、カモシレナイが記憶を表す用法を持っている論がよく見られるが、記憶に存在する事態が固まった「真実」として貯蔵されていることから考えると、当然「客観的な真実」に当たるのである。

は発話時点において沼川がわざと副詞のタシカニを使って、話題を柔軟に取り扱うために注意を払っていることである。

3.4 主張に前置

平田 (2001:62) は、慣用的な言い回しに使うカモシレナイが「前置きの機能」を持っていると捉えている。本発表は言い回しというより、カモシレナイが話し手の意見や観点を醸し出すために、先に相手に信号にあげるという機能を果たしているのではないだろうか。文脈上からすると、カモシレナイが主張に前置きとしての機能を有するため、一応、「+主張に前置」という素性で記しておく。

- (6) 日本人がものを書くときには、このような形での文体の混同はしないかもしれないが、私自身、反省してみると、クラス外で学生と話すときに、相手の理解できる日本語を使おうということに気を取られて、フォーマルとインフォーマルの両方を使っていることがある。(明治)

3. 用法と意味の記述

3.1 カモシレナイの用法

本発表はカモシレナイの用法を次のように記述する。

- (7) カモシレナイ：あらゆる真実に接近する事柄を捉え得る。

3.2 カモシレナイの意義素性

先行研究を踏まえて、本発表は認識的用法と婉曲用法⁴からカモシレナイの意義素性を七つ仮定しておく。

- (8) モダリティ可能性：[+真実へ接近]
[+未知の仮想]
[-命題の断定]

婉曲：[+客観的真実]
[+判断の受容]
[+主張に前置]
[-陳述の同意]

4. カモシレナイと条件節

4.1 BCCWJと青空文庫における検索

本発表は BCCWJ と青空文庫でカモシレナイが条件節に出現する状況を調査した。その結果は前者には4例であり、後者には皆無である。

- (9) 変わるかもしれないならば何も第一と第九これは第一と第九というのは遠く離れているんですよ。(BCCWJ)
- (10) 好きにすればいいと思いますよ。普通免許を取得できるまで原付に乗れなくてもいいとか 更新料を支払うのがもったいないなら更新しない。教習に原付で通うとかで乗るかもしれないなら⁵更新する。(BCCWJ)
- (11) 市井の人びとが無償で提供してくれるせつかくの献血だけど、もしそれが危険かもしれないなら、決然と捨ててほしい。(BCCWJ)
- (12) ことによってその妾の生んだ子が南鄭君の跡継ぎになるかもしれないなら、大夫たちは、競って若く美しい娘たちを兄の元に送りこんでくるだろう。(BCCWJ)

⁴本発表の規定しているカモシレナイの「+事実」という意義素性が「婉曲」のカテゴリに入るかどうかについて、再検討する必要がある。文脈上には事実を表すカモシレナイがよくタシカニと共に起して、婉曲用法にずれ込むことがあるため、暫定的にカモシレナイを「婉曲」に分類するのは本発表の捉え方である。

⁵本発表はYahooを検索して例文の出典を確認すると、次の前書きが見付け出した。

3月の誕生日に原付の免許の更新があります。4月1日から自動車の教習所に通いたいのですが、原付の免許3月の誕生日に原付の免許の更新があります。4月1日から自動車の教習所に通いたいのですが、原付の免許は更新すべきでしょうか？

4.2 考察

従来、認識的モダリティが条件節に現れないことは論じられてきた（浅田・鎌田 1986, 高山 1987 等）。しかし、4.1 節で述べたようにカモシレナイの条件節に出現する異例が 4 つ検出された。

井上（2006）は意義素性の視点でナラ、ト、タラ、バの 4 つ条件節には共通する [+Conditional]

素性があると記述している。ナラを聞き手または一般の認識が想定される [-SP Ass]（話者以外の者の断定）を盛り込むことが可能となる「ナラ 1」と、そうでない「ナラ 2」に分類している。「ナラ 1」と「ナラ 2」を含む主文のモダリティについて、前者には、発話・伝達のモダリティ現われるのに対して、後者には発話・伝達のモダリティを取ることができないとしている。

ここで、注目すべきは、「ナラ 1」には話し手の判断を含んでいないことである。4.1 節に羅列した 4 つの例文の中に、「変わるかもしれない」、「乗るかもしれない」、「危険かもしれない」、「跡継ぎになるかもしれない」という部分はどう解釈いだろうか。

Close (1979:103) によれば、if 節は予測可能性の仮定、すなわちある出来事の起こる可能性、見込みについて仮定するのであるにある（浅川・鎌田 1986:212 が伝えている）。このように、カモシレナイが表している「変わる」、「乗る」、「危険」、「跡継ぎになる」という文脈上にすでに提示されていた可能性がある要素が、ナラ節の仮定する予測可能性の一部として現れることが可能である。

5. 副詞との共起

5.1 副詞ヒョットシタラ

先行研究ではカモシレナイがひょっとして/ひょっとしたら/ひょっとすると/もしかして/もしかしたら/もしかすると等の副詞⁶と共起することが屢々論じている。しかし、(13)、(14) のように、これらの副詞が推測と認識されたダロウ、デショウとも共起することが分かった。

(13) ひょっとしたら、汗の中に、ゆうべ眠れぬままにかぶ飲みした、ジンのあまったるい臭気もまじってんだらうーそう思って… (沈没)

(14) 十津川が、啓子に、それを話すと、彼女が青ざめた顔になって、「ひょっとして川西さんも、同じ犯人に、殺されたんでしょか？」 (仙台)

本発表はヒョットシタラなどの副詞がダロウ（デショウ）とも共起するのはヒョットシタラの持っている意義素性がダロウ（デショウ）にも認可されることに起因するという仮説を立てる。

飛田・浅田（1994:460）はヒョットシタラが可能性の非常に低いことを仮定する様子としている。ヒョットシタラなどの副詞には、少なくとも [+低い可能]、[+仮想性] 等の意義素性が見出される。カモシレナイとダロウ（デショウ）との間にある共通する素性である [+仮想性] が、ヒョットシテの持っている素性 [+仮想性] を認可するということになる。本発表はヒョットシタラの意義素性がカモシレナイとダロウとの間にある共通素性と一致するという立場に立つ。

5.2 副詞タシカニ

本発表は BCCWJ で「タシカニ～カモシレナイ⁷」、「タシカニ～カモシレマセン」という文を 15 例見出した。安達（1997:7-8）はタシカニの機能を二分し、一つを森本（1994）⁸に従って「事実確認」の機能とし、もう一つの機能を相手の言った内容や何やらの判断を確かなものとして受け入れるという話者の態度を表す「判断受容」としている。タシカニが確言形と広い範囲の認識モダリティ形式と共起することも指摘している。

本発表は基本的に安達（1997）に従い、タシカニが [+事実確認]、[+判断受容] の二つの意義素性持っていることを仮定しておく。従って、タシカニとカモシレナイとの間には [+事実の受容] という同一素性が存在するため、当然両者が共起

⁶ 本発表は、ヒョットシタラを代表として論じる。

⁷ カモワカラナイはカモシレナイと類似した意味を持っている指摘がよく見られた。本発表はカモワカラナイを今後の調査項目に加えて考察していきたい。

⁸ 森本（1994:110）は「事実確認」という基本的な機能をもつタシカニが、事実を表す文と結びつくとしている。さらに、タシカニのもう一つの機能である「強調機能」が本来の「事実確認」の機能から移行されつつあるものとして捉えている。

する。しかし、肝心なのは、タシカニと共起するカモシレナイが既にモダリティの用法を失い、婉曲用法しかを持っていないことである。副詞が機能的な主要部によって認可されるのも、語用論的に汎用できると結論付けていいだろう。

- (15) 二百キロ近いスピードで、突っ走る新幹線は、確かに東北の新しい夜明けといえるかもしれないが、建設に当たっての無理が、さまざまな問題を引き起こしていることも、事実である。(東北)
- (16) 「俺もそう思うよ」カウンターの内側から沼川がいった。「通夜や葬儀に来られなかった連中は、せめて同窓会で神尾に悔しみの言葉をいいたはずだ。たしかに中学時代には先生の娘ってことで、神尾を避けていた奴もいたかもしれないけど、お互い大人になったんだし、そんなのはもう関係ないよ」((5) 再掲)

例(16)のケド節に現れるカモシレナイは、文脈上から分析すると、「中学時代には先生の娘ってことで、神尾を避けていた奴もいた」という文が話し手の信念ではなく、ただ単に記憶に貯蔵した事実を言明するだけである。この種のカモシレナイが「+客観的現実」という意義素性を持つため、当然同じく「+事実確認」の意義素性を持つ副詞タシカニと共起することができる。

6 おわりに

6.1 まとめ

副詞とカモシレナイとの共起関係を、機能的な主要部が副詞を認可するという理論の枠を用いて、暫定的に次のように提示しておきたい。

- (17)
- | | |
|-------------------|------------------------|
| [+仮定性] | : ヒョットシタラがダロウと共起する。 |
| [+仮定性] | : ヒョットシタラがカモシレナイと共起する。 |
| [+真実に接近] | : アルイハがカモシレナイと共起する。 |
| [+客観的現実]、[+判断の受容] | : タシカニがカモシレナイと共起する。 |

6.2 今後の課題

三宅(2017:106)は不定詞イツとカモシレナイとの共起関係を論じ、決まった「型」「イツ～カモシレナイ」の意味を、「未来の不定に好ましくない/望ましくない事態が発生する可能性があり、そのことを懸念する」と結論付けている。確かに(18)のように、カモシレナイは未来に好ましくない事態が発生する恐れがある例に使うことが窺えるが、しかし(19)プラスマイナスを問わずことに使う例もある。

- (18) 首都圏では、いつ巨大な地震が起こるかもしれない。
(三宅 2017:96 例(1))
- (19) いつか、頼みに来るかもしれませんが、今日はちがいます。(東北)

不定詞カモシレナイの共起関係を研究課題として、二つの仮説を設け論じていきたい。

- ・「イツカ～カモシレナイ」が好悪を問わず事態を表すことに使える。
- ・「不定詞+か」の場合にもカモシレナイが共起してくる。

実例出典

- ・一般的な書籍からの引用例の出典は以下である。(略号)

- (沈没) 小松左京(1973)『日本沈没(上)』小学館文庫
 (ブラ) 東野圭吾(2020)『ブラック・ショーマンと名もなき町の殺人』光文社
 (東北) 西村京太郎(2010)『東北新幹線殺人事件』光文社
 (仙台) 西村京太郎(2003)『仙台青葉の殺意』双葉社
 (明治) 明治書院企画編集部(1997)『日本語誤用分析』明治書院
 ・現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)

参考文献

- 浅川照夫・鎌田清三郎（1986）『新英文法選書 4 助動詞』大修館書店
安達太郎（1997）「副詞が文末形式に与える影響」『広島女子大学国際文化学部紀要』3pp. 1-11
天野政千代（1999）『言語要素の認可—動詞・名詞句・副詞—』研究社出版
井上和子（2006）「日本語の条件節と主文のモダリティ」Scientific Approaches to Language. 5pp. 9-28 神田外語大学言語科学センター
杉村泰（2001）「カモシレナイとニチガイナイの異質性」『言葉と文化』2pp. 79-93, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻
高山善行（1987）「従属節におけるムード形式の実態について」『日本語学』6-12 pp. 85-97
寺村秀夫（1979）「ムード形式の意味（1）—概言的報道の表現—」『文藝言語研究 言語篇』4号筑波大学文芸・言語学系 pp. 67-89
飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
平田真美（2001）『『カモシレナイ』の意味—モダリティと語用論の接点を探る—』『日本語教育』108pp. 60-68 日本語教育学会
三宅知宏（1992）「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論業 日本学編』26pp. 35-47, 大阪大学文学部
三宅知宏（2017）「“イツ”と“カモシレナイ”の共起関係に関する覚書」『現代日本語研究』9pp. 96-108
宮崎和人（2002）「第4章 認識のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『モダリティ』pp. 121-171 くろしお出版
森本順子（1994）『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
ワンプラディット（2008）「可能性を無くした『かもしれない』」『京都大学言語学研究』27pp. 189-202
Close, R. A. (1979) “Will in if-clause.” Greenbaum, Leech and Svartvik(eds.)